Mangrove Science Vol. 3 ; 1−4. 2004

日本マングローブ学会創設者故杉二郎先生追悼

−日本のマングローブ研究草創期と杉二郎先生−

中 村 武 久

Prof. Jiro Sugi and the daybreak of Mangrove research by Japanese scientists

Takehisa Nakamura

1999年マングローブ学会懇親会（学会に出席された最後）で挨拶される　杉　二郎先生

東南アジアマングローブ研究を興隆した二人
（サンガ・サバシ博士と）

杉先生追悼のことば

日本マングローブ学会の創設者でもあり，初代学会長であった東京大学名誉教授、東京農業大学名誉教授、農学博士　杉二郎先生は，2002年９月24日未明89歳の生涯を閉じられました。我々マングローブ研究に取り組む者にとっては、大きな支えを失ったことになり，誠に痛恨の極みです。

杉先生は，マングローブだけでなく、我が国における農学系科学者として極めて旺盛な研究意欲と且つ広範な研究分野に目を開かれ、ことに研究者を育てることに優れた能力を持っておられました。先生は農業工学が専門でしたが、塩にもまた関心が深く、日本海水学会長を歴任されたり、ソルトサイエンス財団の運営に関わったり、またそれらの集約学際的分野として日本生物環境調節学会を創設され、自らの研究を進めると共に、若手研究者を指導し、多くの優れた関連科学者を育成されておられます。

1982年，沖縄で開催された国際マングローブセミナーの折り，かねてから杉先生が発案されていた日本マングローブ学会が設立されました。しかしこの学会が設立されるまでには、それ以前からのマングローブ研究への胎動があったからであります。その最も大きな一つとして，後述するISME（国際マングローブ生態系協会）の誘致とその前提となった日本国際マングローブ協会の設立が関わっていました。それらの組織化もさることながらマングローブ研究の大きな流れを作り出したのは，他ならぬ杉先生でした。

我が国でマングローブが分布するのは琉球列島のみで、しかも生育面積も僅かで、本来熱帯の植物であるマングローブの北限分布地として知られている程度であり、我が国が熱帯の国と肩を並べるマングローブ国とは言えないのに関わらず，杉先生は我が国に多くのマングローブ研究者を育てると同時に，東南アジア諸国のマングローブ研究を興隆し、また一般社会へのマングローブ普及に多大な貢献をされました。

こうして日本でのマングローブ研究を興し、且つマングローブを普及された、今は亡き杉二郎先生の追善にと思い、以下日本におけるマングローブ研究の草創の頃について述べ、極めて多くの研究指針を頂いた杉先生の墓前に、感謝の気持ちを捧げる次第です。

1．マングローブ研究の発端

1971年，文部省の傘下である日本学術振興会（JSPS）の、拠点大学方式による途上国との研究協力プロジェクトが発足し，このプロジェクトの中心的役割を担っていた杉二郎先生は、再々タイ国を始め、インドネシア，フィリッピンへ出かけ，相手国の研究機関や研究者に会って，農林水産及び環境科学研究プロジェクトの展開を計っていた。

そのプロジェクトが立ち上げられて間もなく，1976年，杉教授がタイ国を訪れた折り、当時N.R.C.T.の局長であった前カセサート大学林学部教授のProf. Sanga Sabhasri博士に会い、日−タイ学術交流についての話し合いの中で、Sanga教授より次の提案があった。「現在タイのマン

グローブ林が薪炭用伐採、塩採掘のための伐採等が行われ、壊滅的な状態にある。この荒廃したマングローブ林の修復造林を思案しているが、その為のマングローブに関する学術的な情報に乏しい。そこで日本でマングローブに関心を持つ研究者とタイ国の研究者との共同研究プロジェクトを発足させたい。」というものであった。

丁度その頃、杉先生は文部省科研費特定研究「温帯熱帯の比較農学的研究」を持っておられ、そのプロジェクトの幹事会の折り、私にマングローブについての認識を質し、これへの参加を指示された。マングローブというより熱帯への関心が強かった私は即座に快諾し、この特定研のプロジェクトの中に一部取り込んでもらうことを計った。しかしこの特定研は最終年度でもあったことから、取り込みは無理であることになり、先生は別途マングローブ研究プロジェクトを発足させることを考えていた。そして1978年、生憎私は参加出来なかったが、JSPSの派遣で、当時横浜国立大学の宮脇昭教授、鹿児島大学水産学部の野沢恰治教授、京都大学農学部の荻野和彦助教授、東京農大の端山好和教授、檜垣宮都助教授（当時の所属）等と共にタイ国半島部のマングローブ視察に出かけた。

これ等の視察を通じてその後、宮脇昭教授はタイ国でのマングローブ研究プロジェクトを科研費申請し採択され、1981年から調査に入った。また84年に荻野和彦助教授の科研費プロジェクトが開始され、その1年後、杉先生をヘッドに中村武久が幹事役の科研費タイ国でのマングローブ研究を開始した。こうしていよいよ我が国における近代マングローブ研究が始動したのである。

カセサート大学サニット教授と（1996年8月）

国内的には、これより2年ほど前から琉球大学の中須賀常雄助教授等の沖縄におけるマングローブ研究がスタートしていた。

2．研究交流の開始

前項に示すように、我が国のマングローブ研究の発足に大きく関わった、日本ータイ国の学術研究交流事業が、これより数年前から始まっていた。その中の具体的事業の一つとして、マングローブ関連の研究交流事業が取り上げられるようになったのである。ここではそのマングローブ研究の発展につながった、杉先生が中心となって開催された研究交流事業の概要を以下に記す。

1979年9月、京都大学荻野和彦博士の招聘で、タイ国のマングローブ研究者，Dr. Sanit, Mr. Jitt, 及びMr. Suchinの3名が来日、京都大学会館においてマングローブ研究推進の話し合いがおこなわれた。この会議に東京から杉二郎先生、檜垣宮都、中村武久が参加した。会議後、タイからの3名は東京へ同行し、日本の森林研究の現状等について情報交換を行った。

1980年3月、東京農大において、杉二郎先生が研究代表者の文部省科研費特定研究総括セミナー「温帯熱帯の比較生物生産 (SCATT)」が開催され、これに集まったタイ、インドネシア、フィリッピンの研究者のなかに、マングローブ問題を取り上げた研究者がいて、マングローブ研究の必要が論じられた。

1980年11月琉球大学において国際マングローブセミナーが開催（JSPSとSAEDAの共催）された。このセミナーにタイ国からの出席者はDr. Sanit, Dr. Jitt, Mr.Suchin, Mr. Sopon, Mr. Pen, Mr. Prachim, の6名。そのうちのMr.Sopon, Mr. Pen, Mr. Prachim, の3名は、宮脇昭教授がホストとなり約1ヶ月横浜国大で研修を受けた。Dr. Sanit Dr. JittとMr. Suchinは杉先生の招聘で東京農大を訪問し、今後の研究交流について討議したが、これがタイ国よりのマングローブ研究交流招聘の最初である。

1981年10月、農業の研究と農業教育に関するアジアセミナー (SAREA) が東京農大で開催され、この中に1セッションをマングローブ研究が含められていた。結果的にはインドネシアからの出席予定者が欠席となり、タイからの2名と日本側の3名で、いずれもマングローブの利用に関する演題の学術討議を行った。

1981年12月、中村武久は杉先生に同行し、タイ国東北部の塩性土壌研究プロジェクト（高井）の視察後、檜垣宮都、長野敏英、加藤茂と合流し、ソンクラ、プーケット、ラノンの3ヶ所のマングローブを予備調査。具体的なマングローブ研究プロジェクトの立ち上げ計画について検討した。なお帰路沖縄西表島へ寄り、タイ国マングローブ植物3種の胎生種子の移植試験をおこなった。

1982年8月、タイ国王政200年記念　自然科学とマングローブ資源に関するセミナー (NRCT-JSPS RATTANAKOSIN BICENTENNIAL JOINT SEMINAR ON SCIENCE AND MANGROVE RESOURCES) がJSPSとNRCTの共催でバンコクにて開催された。これに杉先生を団長として、大勢の日本人マングローブ研究者が参加した。

1983年10月、JSPSとSAEDAの共催の東南アジア国際マングローブセミナーを広島大学において開催。タイ国よりDr. Sanga Sabhasri, Dr. Sanit, Dr. Jitt, Ms. Prapasri, Dr. Thawachai, Dr. Amom, Dr. Anant, Mr. Somchai Dr. Nittharatana 他総勢21名を招聘して開催した。この内JSPSの研究交流でMr. Sa-ngob（中村）, Mr. Naris(檜垣), Ms.

琉球大学における国際マングローブ生態系セミナー
懇親会場にて（タイ国からの出席者らと1980年11月）

Sauapa(丸茂)、Mr. Vipak(荻野)、Mr. Somsak(中須賀)、Ms. Arunee(野沢)の６名はカッコ内の日本側ホストのもとで約１ヶ月の研修を行った。

1984年以降89年まで、毎年２～４名のタイ国マングローブ研究者の招聘研修が続き、正確には把握していないが、当時広島大学の倉石晋教授、その後愛媛大学に移籍された荻野和彦教授、香川大学の井上裕雄教授、鹿児島大学の野沢恰治教授、横浜国立大学の宮脇昭教授、及び東京農大の前記３教授の元で研修した者、30名を越える。これらの研修を受けた者は、それぞれにタイ国のマングローブ保全管理の現場で責任ある立場に着き、また日本を含む外国からのマングローブ研究調査に大きな役割を演じている。

これらの研究交流の実績は、全て杉二郎先生のマングローブ研究推進へ払われた努力の賜であるといってよい。

これらの中で、杉先生直接ではないが、杉先生の提言やらタイ国との研究協力が大きく働いて日本国際マングローブ協会 (JIAM) の設立（設立時会長は斉藤鎮男元国連大使、杉先生は副会長。途中で斉藤氏が ISME 副会長に就任したので、杉会長となる）。この日本国際マングローブ協会が、国際 NGO としての ISME の招致に関わったのである。また ISME 発足後、国際的には ISME が存在するので、それまでのこの協会名の国際を削除して、日本マングローブ (JAM) として改組した。

文部省科研費で最初のタイマングローブの調査に入った
横浜国大　宮脇　昭チーム（1982年）

３．日本マングローブ学会の設立とマングローブ研究

JIAM 設立の２年前、ISME 設立の前年、すなわち1980年、結果として ISME 設立の準備会議でもあった、前述の沖縄で開催された「国際マングローブセミナー」の開催中に、杉先生の提案で、急遽日本マングローブ学会の設立を準備する事になり、中村は暫定会則案を作製し、セミナーの最終日、セミナーに参加した日本人マングローブ研究者が集合し、そこで杉二郎先生から設立趣旨の説明があり、会長杉二郎、副会長宮脇昭、幹事役員中村武久、荻野和彦、倉石晋、檜垣宮都、中須賀常雄の５名。事務局は東京農大に置く。会費は会員の殆どが JIAM 会員でもあることから、たとえ一方の会員でも年額5,000円。という大綱を決め、すなわち形式的には1980年11月、日本マングローブ学会が新発足したのである。

しかしこの方式は大変不都合で、会費は全て JAM に払い込まれる。JAM では元々の会費であるから、学会費としての部分が区分出来ず、そのため学会には経費が廻ってこない。さらには、それまでの JAM 専務理事であった堀建治氏が名古屋へ居を移されたため、後任に今は亡き井上静男氏に代わり、井上氏はそれまで堀氏が１人で処理していた協会事務を３人体制で行うようにしたため、運営上の不都合を生じた。

そんなトラブルがあって、学会分離独立の意見があったが、協会 (JAM) 自体が国際を外したこともあって、活動機能がかなり収縮している。そこでむしろ協会の主たる活動は国内的なマングローブ研究に絞られてくる。という見地から、協会の会則一部変更し、日本マングローブ協会の中に、事業部と学術部とを設置し、当分の間学会活動に集中することを決めた。そのため、一昨年までの学会年次大会は、日本マングローブ協会学術部会アカデミック・ミーティングとして開催してきた。そしてようやく昨年から協会から切り離して、日本マングローブ学会年次大会とした。

日本マングローブ学会の出発は古く1982年であるが、学会活動として形を作るようになったのは、1984年１月、日本のマングローブ研究者による「マングローブ　ワークショップ '84、」を東京農大グリーンアカデミーホールで開催したことである。この学術集会は、農大総合研究所と JSPS の援助で開催されたもので、発表件数26題、参加者56名という盛況な集会であった。しかし、予算を持たない学会としては、こうした外部の援助がなければ運営もおぼつかない。結果的には杉会長の号令で、文部省科研費を始め、他機関からの研究助成を得て、沖縄方面のみならず東南アジア、南太平洋、中南米、アフリカ等でいくつかの研究チームが調査研究に取り組んだ。

その１例が前１項の終わりにも述べた、宮脇昭らのタイ国のマングローブ植生生態学的研究。荻野和彦らによるマングローブ生態系の森林生態学的研究－マングローブ林のバイオマス－。そして杉・中村らの東南アジアマングロー

プの生理生態学的研究。その他年次的に推定20件以上の助成研究が行われた。

こうして今や我が国は国際的にも、マングローブ研究については主要な地位を占めており、ISME の活動と共にマングローブ研究は熱心に続けられている。

こうした経過を省みると、まさに杉先生の先見の明というか慧眼というか、はたまた先生の未知なる事象への研究意欲の強烈さの現れかと、只々頭の下がる思いに駆られるのみである。